小学校五年の部　第三席

――――　対象作品／アンドリュー・クレメンツ作『こちら『ランドリー新聞』編集部』講談社

自由と責任

弘前大学教育学部附属小学校　對馬朋笑

わたしは、これまでずっと新聞係だった。四コマまん画やうらない、クイズなど、読む人を楽しませる工夫をして新聞を作ってきた。みんなを楽しませる以上に、わたしが書くことをとても楽しんでいた。

カーラ・ランドリーは、長らく「教える」という事をしてこなかったカール・ラーソン先生のクラスに転校してきた。「ランドリー新聞」を始めたカーラは、仲間と共にクラスメートの「離婚の物語」をのせた。先生と対立している校長のバーンズ博士は、この新聞の物語を使って、先生をクビにしようとする。先生は、子どもたちと新聞を守るため、「報道・出版の自由」について教える。そして、カーラは聴聞会で先生を救うのだった。

読み終えて、カーラの新聞はただの楽しい新聞ではなかった事におどろいた。カーラの新聞には、人の言動を変える力があった。新聞の役割や、「報道・出版・表現の自由」について考えさせられた。

わたしは、夏休み中に新聞記者のお仕事体験をした。その時、記事の原こうにインタビューした事実と感想を書いたが、どちらかというと作文のようだった。編集してもらった新聞には、わたしの感想はカットされていた。きっと、記者の気持ちを書いてしまうことで、読み手に一方的な考えを植え付けてしまうことになるからだろう。新聞やニュースを伝える時は、公平に事実を伝え、読者に自由に考えてもらえるように気を付けているように感じた。これは、人のことを考えている一種の思いやりだと思った。だから、ニュースを受け取った人が、自由に考えたり話し合ったりすることができるのだと思う。

では、表現の自由とは何なのか。今、世の中はインターネットがある生活が当たり前になっている。誰でも自分の考えなどを気軽に発信でき、とても自由だ。しかし、「自由すぎる」ことで自分の意見に責任をもたない人、個人をひぼう中傷する人が増えている。やはり、自由だからといって、何で

も好きなように表現して、何を発信してもいいわけではないと思う。その間違った自由が、いじめや心の病気につながることもある。この時代に必要なのは、きっと「人のことを考えられる優しさ」なのだろう。「人のことを考えられる優しさ」をもっているなら、自由に好きなことを投こうしてもいいのではないかと思うし、人をいい方向に変えたり、心を温かくしたりすることができると思う。

わたしはスマホも持っていないし、何かを発信できるアプリを使ったこともない。でも、この先これらを使うようになった時には、「人のことを考えられる優しさ」を大事にし、表現することの自由に責任をもちたい。そして、将来の夢である作家になったら、この気持ちで人によりそえるものが書きたい。